

ひな祭りの由来

ひな祭りの由来は平安時代中頃に、もともと紙人形を作て海や川に人形を流し、身のけがれをおはらいする行事からきています。現在でも一部の地域では「流しひな」などの風習が残っています。

ひな祭りの語源

現代ではお清めやおはらいといつよりは女の子が健やかに育ち、幸せであるようにとの願いを込めてひな人形を飾るのが風習となっています。桃の花を供えてひなあられ餅などと一緒に並べるか一般で祝いの席でちらし寿司や甘酒(白酒)、ほほぐりのお吸い物などが供されます。

ひな人形を飾るには嫁を授かった親の「子の幸せを想う気持ち」や女性を難事から守るといった意味合いが込められています。

ひな人形の歴史

ひな人形の起源は中国にある「上巳節」という3月初旬の節句を、災難や厄を避けていたりに受け入れた人形を川へ流す(流しひな)という行事に、平安時代の宮中でおこなわれていた人形遊びの「ひな遊び」といったいくつつかの行事が合わさって生まれたとかされています。

上巳節は「3月の始めの巳の日」で冬から春へと移り変わる季節の節目に悪いことが起こらないようにといふ思いで厄払いなどを行っていたものが日本へと伝わり、「流しひな」と貴族のままごと遊びが「ひな人形」で幸運を願う行事へと変化していったようです。



流すものから飾るものへ

平安以後武家社会から江戸時代へと時代が移っていくと、江戸幕府によって5つの節句が制定されます。5月5日の「端午の節句」には男の子の成長を祝い、3月3日の「桃の節句」には女の子の成長を祝うようになっていったそうです。

また江戸時代になると職人の手により、人形作りの技術も発展し人形も美しく精巧なものへと変わり、次第にひな人形は川へ流すではなく家中で大事に飾るものへと変わっていました。豪華なひな人形は武士の家の娘と嫁入り道具の一つとして加わり、高価な人形を持たせることのできる家は福縁を証明できるとして男雛と女雛以外の人形や高いひな段なども加わり、現代のひな人形に血の形が出来上がったようです。

西洋式では向かって左に男性、向かって右に女性の頭を並ぶだけ、昭和天皇上皇后の並び方にない、下な人形を作る東京か木下がこれを並び方を変えたものが現在の形となるのです。

ひな祭りに桃の花を飾る

もうじと旧暦の3月初旬頃の桃の花の見ごろだったこともあり、ひな祭りを「桃の節句」として桃の花を飾るようになりました。

桃の花は春の季語にもなっており、薄いピンク色の花びらはどこか春に微笑む若い女のイメージを重なり、ひな祭りの飾りにぴったりの優らし・花といえるでしょう。

仲間はずれのコスモス→秋に咲く鮮やか→貝殻③アルバヤ→ラクダ科